

ZEN

全道展機関紙

No. 10

全道展機関紙“ZEN”第10号 昭和58年4月10日発行
発行所 全道美術協会 事務局 〒063 札幌市西区山の手3条11丁目

後藤庸也方 T 011 (631) 1602
印刷 中西印刷株式会社 011 (781) 7501
編集委員 嵐 玲子 斎藤 洪人 坂口 清一
渋谷 栄一 谷内 丞 山口 惣市

新事務局偶感



全道展事務局長

後藤 庸也

昨春秋、渡会事務局長より引き継ぎを受けたが、なんと荷物の中には小型、大型印刷機を始め、37回展までの記録、資料等、段ボールで数10個あり、みな会の歴史がこめられた荷物ばかりであった。彼の家の中が片付き、奇麗になったというが、むべなる哉である。実に事務局は、これだけの財産を抱えていた訳である。

早速、西村喜久子さんや、北川豊君の葬儀などのお世話があったが、それよりも私が会の運営について、あまりにも知らなすぎるということであった。今までは事務局や、会務委員が全て計画してくれて、われわれ会員はそれに従っていればよかったが、事務局を担当してみても、年間通してのスケジュールがあり、12名の会務委員と道新の相原さんは、つねに会の運営についての会議をもち、ある時は深更に及ぶまでの話し合いが続くなどたいへんであることを痛切に感じた。

まず当初の問題として審査の方法について

の検討があるが、これは130名の全会員によるアンケートをとり、それを分析して方向性をだすわけだが、価値観の多様化の時代に、それぞれの審査の方法については一言言っている会員諸氏である。全道展という公募展のエネルギーを爆発させ、会の発展をはかるために強い意志の共通と交流をはかり、益々の会の質の向上のために模索し、話し合いを続けていかねばならないと考える。

全道展の将来を見通し、会が生氣を失わないで常に活力を持続させていくために、全会員が作家としてのそれぞれの部門毎に精根こめた作品を発表することが根底にあると共に、審査の方法についても、4部門が連帯のもとによく審議し、現時点での最良の方針が確立されなければならないのではないか。

これが本年度の事務局及び会務委員に課せられた大きな課題であり、このことは、いつも会の運営の中にすえていかねばならないこと

第38回全道展せまる

第 38 回 全 道 展	
搬入	6月15日(水)～16日(木)
審査	6月17日(金)～19日(日)(3日間)
陳列	6月28日(火)
会期	6月29日(水)～7月10日(日)
企画展(全道展会員による版画展)	
会期	6月6日(月)～6月11日(木)

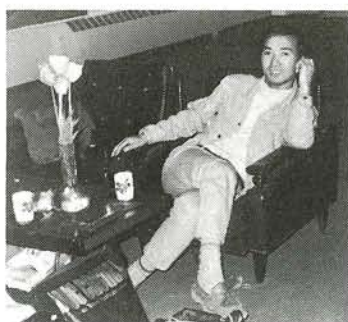
新事務局紹介

事務局長 後藤 庸也
会 計 池 田 正之助

会 務	委 員
編 集	斎藤 洪人/渋谷 栄一
企 画 展	佐藤 靖/寺崎 源治
巡 回 展	長谷川忠男/前野 昌市
学 生 展	伊藤 寿朗/大地 康雄
会 合	岸本 裕躬/大地 康雄
本 展	竹内 豊/前野 昌市

とだと思ふ。

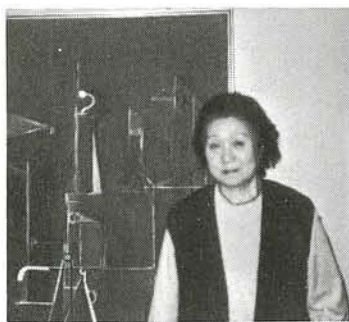
また拡大委員会のなかでも審査の方法については、アンケートを分析した結果、入落の決定は部門別にした方がよいということになったが、これは反面、たいへん問題も含んでいることにもなる。組織が大きくなれば、部門別審査という問題が、将来的には移行しなければならないが、現段階で行なうとするならば、全会員が心しなければならぬことは、決して部門毎のエゴにならないことと、大局的な全道展の方向性や、会としての発展や、信頼される公募展としての力を持続させるために4部門の審査にあたっては、会の基本理念である「厳正にして、中正なる審査」という決意をあらたにすると共に、つねにその都度、反省し、話し合っていかなければならない。これらについては38回展審査の前に提示し、検討し、確認し、協力を仰ぎたい所存。



▲病魔におかされる前の元気な北川さん

北川君を 偲んで

浅野 武彦



▲後輩の個展会場で、在りし日の西村さん

西村さんを 偲んで

鎌田 俳捺子

時には童顔。時には異様な眼光と熱気につつまれた顔。時には病魔におかされたいたいしく痩せて眼窩の落ちくぼんだ顔。医師として発病から最後までみとった私には、臉をとるといういろいろな彼の顔がほふつとする。病名は急性骨髄性白血病。発見時には如何ともないまでもに病勢は進展していた。ふり返ってみると、全く絵画一筋に生きた人生だった。――安井貫というのはいすね、候補にあがったけれどもうたえないものなんですよ。普通の画家ではもうえ話でもしているかの様に語るところに、彼の面目が躍如とした。口角に泡をため、やや早口な話し方。話は一方的に自分の好きな作品、尊敬する作家の方へ進み、且

追悼 西村 貴久子 会員 北川 豊 会員

つ夢中だった。彼の純真性のしからしめる所であり、熱中出来るという事が何にも勝る彼の長所だった。――丁度絵画を彫っているところへやってくる。彫刻刀で面白いほど良く切れるものですね。子供の様に眼を輝かしてのぞき込み早速自分でもやってみる。感急性好奇心の塊りの様な男だった。すべてがこの調子だったので、短い年月の間に先輩のものをぐんぐん吸収して行ったのも尤もな事と、大いにならずかるのである。――麻生三郎、須田国太郎等、彼が好き作家について語るときに、同意を示すと相好崩して声をあげて喜ぶ彼だった。美術関係の集いの時だけは、あまり飲めないアルコールを手にながら、作家評や

55年の暮、それは細雪の舞う寒い日の夕方でした。西村貴久子さんの友人という方から、突然連絡があり、「一緒に帯広まで来てください。西村さんを見失なっています。十勝川温泉にゆかれるとおっしゃっていましたが、足がお悪いので心配しているのです」ということでした。とにかく急いで事務局に連絡し、渡会さんに相談し、十勝川温泉のホテル、旅館に電話して調べましたところ、やっとなある旅館におられるのを突き止め安堵したのですが、そのとき、私にはなにかしら不安な空気を予感したのです。西村さんとおつき合いは短い間でしたが、柔和なあたたかい、人情味の豊かなお人柄の内面には、絵画に対して強い

情熱と、意志と、信念で生きてこれた画家の持つ鋭い目が光っている、いつもその意見の高さには訓えられることが多かったのです。若いころや、東京時代のお話しも折にふれてうかがいましたが、晩年は病人の介護に明け暮れての生活に、写生旅行も思うにまかせなかつたようで、中東での数枚のデッサンを頼りに、イメージをふくらませて制作をなさっておいででした。アファンの男や女、羊など、さまざまに構図を変化させながら、しかも鮮明な色彩と関連な筆法は生々として、少しもマンネリズムにならないのが私にはとても不思議でした。若さを持続させられる、ということが天賦の才能につながるのか、ときには童

画技等について話は尽きず夜の更けるのも忘れる事が屢々だった。好伴侶を得、自分の家庭を持ったという安心感、幸福感にしみじみとひたる事が出来た様で、彼の絵にも何か家庭的な暖かみを感じ始めたが、それでもキャンパスに向くと、新妻の存在を忘れそうになり、奥さんに淋しそうな顔をさせる事も屢々にあった様だ。間もなく一粒種、亮ちゃんの出現で、近所の人にも「いつも三人で幸福そうに散歩してるんですよ」と噂される様になり、55年の「人間の風景」には二人の人物の間に子供も描かれ、色彩も明るくなつて微笑をもつて眺められるのだった。あの頃が彼の幸福の絶頂だったのかと、今更の様に思い出されるのである。

女のように喜々として、泥鰌炒めを踊られたり、75歳の年齢を少しも感じさせないほどの若さでした。お元気な西村さんも、ご主人が亡くなられてから、日一日と衰えをみせたよう「主人と歩いたところを一人で歩いてみたいから」とニコリ手を上げて別れた日も、孤独感に苦しみ、悩みつづけていたのでしょう。ついには張りつめていた心の支えも、燃焼しつづけた心の灯も、一度に吹き消されたように、再び起きることが出来なかつたのです。「札幌の画家は横の繋がりがないのね」「仲良くしましょう」「お互いに絵の批評をし合いましょ」と腹藏なく心の扉を開く純粋さに心打たれたものです。一樹の陰の不思議な縁でした。無言の叱咤激励をうけたのに、もう未来永劫お目にかかることがないと思うと、飛化落葉、寂寥としたおもいが胸のうちを駆けぬけるのです。

第25回学生美術全道展

9月1日(木)～9月6日(火)(搬入8月28日(日)) 於:札幌(井)今井

道都さっぽろの中心に
美と芸術のひろば

アートギャラリー さいとう

札幌市中央区南1条西2丁目5階
丸一ビル2F T 011(222)3698

オーク画材

札幌時計台
ギャラリー

〒060札幌市中央区北1条西3丁目
札幌時計台文化会館 ☎261-8971

洋画・日本画材料

大丸藤井
セントラル

札幌・南1西3

全道展巡回展奮戦記(2)

■根室展■

根室市公民館主事

佐田正蔵

全道展が根室市で開催されるようになってから12回目を迎えた昨年、第37回全道展根室巡回展は、はからずも異例のものとなってしまった。

事の起りは、地元のパレエ発表会の仮受付と全道展の会期が重なってしまったことである。日時会場の変更を再三にわたってお願をしたのである。だが、すでに東京や札幌から来られる先生方のスケジュールの変更はできない、ホテルのキャンセルも不可といわれ、その夜、さつき長谷川先生、渡会事務局長に事情を説明したところ、「会期変更の巡回展など、今だかつてない。もう一度説得するよう努力すること」ということで、再度変更をお願いした。「全道展も地元文化団体の発表会も、共に文化性の大切な点では同じではないか。はかりにかけようと考え方は……」

結局、パレエ公演の開催変更が出来ず、舞会使用が絶対条件という中で、やむを得ず、当館より20メートルばかり離れている武道館を会場に考えたのである。全道展道新の主催者にお願したところ、作品管理に最大限を尽くすことを条件に開催する運びとなった。

さて、会場設備は、予想外に大変。パネルをはじめ、すべての材料を運ばなければならぬ。土足で観覧できるような、又照明の設置など、いつもより準備の倍以上の時間と労力が費やされ、これまでの会場とはひと味異なった手づくりの暖かさすら感じられる会場となったのである。

ほとととしたものつかの間、作品の搬入も終り、明日より開催という夕方、警備をお願いしていた根室警察署より、連続放火事件が市内で発生、犯人が見つかからないので十分の警戒をするようにと……

本道の会場であること、全道展との約束である「最大限の管理……」の考慮から夜間警備をすることにした。寝袋を持ち込み、30分おきに会場の内外の巡視、勿論火気厳禁である。朝日が昇る頃公民館に戻り、ソファーで仮眠、ぐっすり寝込み、清掃のおばさんに起こされるという具合であった。

6日間の会期が終了した時、長い全道展が終ったという実感もあることながら、作品の大切さを身を持って体験したという気持ちも強く、まだ会ったことのない作家の方々に、無事一作品をお返し出来ることに安堵し、一つ一つの作品に愛着さえ覚えたものであった。

真赤な夕日に向かって行くトラックを見つめながら、第37回全道展根室巡回展の無事終了したことを、それぞれが感慨をもつての公民館職員の見送りであった。全道展、北海道新聞社各社に心よりお詫びと、お礼を申し上げ終ります。

■室蘭展■

会 員

北 浦 晃

昨年九月二日から六日まで、室蘭市では九年ぶりの巡回展が開かれた。いい展覽会だったし、市民の反応も大きく、盛会であった。

自分の、それも随分古いことを少し書けれど、ぼくの初人選は第九回展で、美唄の山奥の炭鉱に住んでいた高校生の時だった。今は炭鉱が閉山になって、もとの原始林に戻りつつあるというあんな山奥に、当時は全道展が毎年来ていた。

第九回展では渡辺真利氏の作品や野本醇氏の「氷の行進」が新鮮な受賞作として目立っていた。会場の中学校の薄暗い壁にかかっていた砂田友治氏の静物の鯉の切口の鮮烈な赤が今でも目に浮んでくる。そんな中に自分の貧しい作品を並べることができて、ぼくは興奮していた。

室蘭での巡回展は、この第九回展から始まって六年間、毎年開催されている。この間、渡辺真利氏に続いて熊谷善正氏、故太田実・浅山咲知・佐久間(金丸)恭



▲室蘭展会場 (道新提供)

根室・室蘭

子氏等の受賞をはじめ毎年十数名の入選者をだし、作家が成長し多くの新人が登場してきたのは、現在の文化センターの場としての役割は、不備な条件の中を自分達の手で巡回展を続けた熱意と無関係ではない。例えば若い作家が「氷の行進」について語るとき、あの作品は重かったと言う。作品陳列の実感を手が覚えていく。ぼくはそんな話をきくのが好きでよくきくのだが、話の中にぼくの知らない名前がいくつも出てきて、それは巡回展を応援しつづけてくれた市民のことだったりののである。

(昔話だけで四十行……噫)

昨年は室蘭市の市制六十年・開港百十年ということで、記念行事としてしばらくぶりの全道展をやるということになった。経費の大部分を市費で支出し、実際の運営は作家側ということで両者を含めた実行委員会がつけられた。資金集めに歩かなくてよかった。広告をいれないパンフレットをつくった。飾付け・搬出には道展の作家たちも集まってくれた。札幌から来てくださった谷口一芳氏の入念なチェックの中で陳列作業をしているとやはり昔の感覚が甦ってくるのである。

入場料は無料にできた。一千五百人の市民が観に来たという結果からみると、一人当たり二百円弱の入場料を市がはらってくれたことになり、こんな上等な税金の使い方はめつたにないと思う。一年きりの特別行事というところであったが、毎年予算化し、全道展・道展の隔年開催という方向が出てきた。関係者の努力とファンの力だと思ふ。

昔話ではぼくは、いわば巡回展育ちとでもいった作家達がいることを言いたかった。気鋭の新人が全道展に結果して……ることを期待。室蘭新時代はくるか……

企画展「全道展会員による版画展」6月6日(月)～6月11日(土) 於：大同ギャラリー札幌

ざんしんデザイン
良心的な製品

株式会社 松岡額縁店

札幌市狸小路5丁目 TEL代251-9000

緑の空中庭園に囲まれた
ギャラリー

大同ギャラリー

札幌市中央区北3条西3丁目
札幌大同生命ビル TEL 241-8271 内88

印刷の美を、私達は考えます

中西印刷株式会社

札幌市東区東苗穂町505番地 ☎011(781)7501

全道展作家探訪(6)

折原久左エ門

会員

—内在する虚と実の世界—

中川 真一郎



「折原久左エ門」——姓名に、すでに工芸家としての存在感を覚えるのは、ひとり私だけではないと思います。名付けられし、その時から……と思わずにはいられません。微笑をたたえた風貌と合い間って何か工芸家としての先生の全てを物語っているようにさえ思われます。

折原先生が岩見沢分校から函館に転勤されてきたのは昭和三十六年です。いらい二十一年間学生の指導に情熱を注がれてこられました。私はその当時から教えを受けた者の一人です。編集委員会からお互い会員同志ということではテーマを与えられたのですが、「先生」という敬称をお許しただきたいと思

いま、先生の「人と作品」という題で書くことになり、あらためて深部については未解折の部分が多いのに痛感いたします。少しでも理解できることがあるとすれば、酒宴の席や雑談の中で折にふれて話されたことなどから少し垣間見ることが出来る程度です。

また、作品が作家の手から離れたら一人歩きすることは、単に文学、音楽などだけでなく造形の世界でも同じことだとよく言われることです。そんなことから、私流の折原観になるものと思われま

先生の着任当時は、周囲に集る私どもとよく一緒に行動をしてくれました。酒豪で、ウイスキーの角瓶を二本は軽く空にし、もつと

も年とともにそれも半分になり、今では、平均日に三合と聞きますが……。その集いが講義の場で、工芸について具体的に話したり、討論したりする時なのです。先生は私にとって、未知なる工芸界の扉を開いてくれた人でもあります。

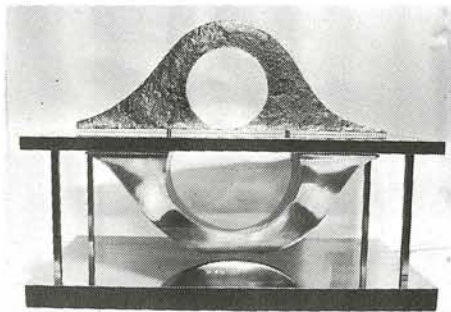
二十年前の全道展の工芸は、出品者は少なかったのではんの数点だったように記憶しております。先生は当時から全道展工芸の発展を全国的視野から見て行動し、現在の工芸界をその時すでに予見していたでしょう。また、私たち他数名は卒業当時、東京での展覧会に先生を先頭にして、修学旅行よろしく連れていって、宿泊代なども出してもらった記憶があります。日展では、自分の落選にもかかわらず入選した私たちのために、必ず一緒に上京してくれたことは、私の心に強く残っております。

年末の集まりの時、上京の事、酒を飲んだ事などの話が出た折、「よくお金があつたものだ」と苦笑されました。

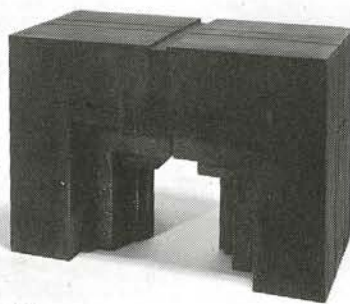
当時のお話して、数々の強烈な印象の中の一つに「一個の花器を作るにしても『用』としての作品だけでなく作品そのものがきちんと造形的な位置を持って鑑賞に耐えるものでなければならぬ」といわれたことがあります。

このことは現代の工芸美術の基本的な理念として定着しているようです。また、「作品はあくまでも自分の

感覚と思想の表現であり、それを完全に或いはそれに近づく表現をするために技術や知識が必要になるにすぎない」とも主張して伝統的な技術の否定は厳しくいまして、むしろ大切にしながらさらに発展的な展開を心掛けていた言葉だと



▲連作 接 1975



記録 1982

以上のいろいろな機会に出てくる言葉は、そのまま先生の作品でもあるようです。なかでも「結びの空間」(道立美術館蔵)は黄銅(真鍮)とステンレスを現代的に解釈したくみに処理することによって、もつと精神的緊張感を強烈に与える作品の一つです。「結」とは、「用」としての結びだけではなく、ある絶対を神としてとらえ、「神への折り」を結ぶ」という意味を持ついわば精神的結びであり、またそこに創出された空間は、宗教世界の「結果」(注広辞苑によると「堂塔・伽藍の境域を定めること」、修業者のさまたげになることを許さないものとしてあるもの)としてあ

思われます。私はその証拠として、単に古いものを集めるということではなく、技術的に標本として、あるいは手本として残さなければならぬと思われる日常雑器・労働農具などの集収によく表われていると思っています。

個展・グループ展の貸額縁と額縁製造
販売・公募展の搬入・搬出の代行作品
運送には是非御利用下さい(多少にかかわらず御連絡下さい)

美術展覧会貸縁・美術品扱専門店

北 陽 美 術

〒061-24 札幌市西区手稲前田657-110

☎ 011 (682) 6340



▲新年会 於 共済サロン

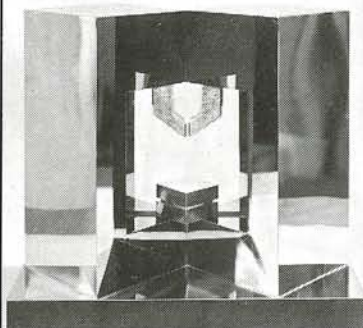
和気あいあい 全道展新年会

一月二十三日(月) 午後六時〜八時 於 共済サロン
予定より十分少々遅れて開会、後藤庸也事務局長の威勢のよい挨拶でスタート、会場は赤いジュタンで色彩も豊か、シャネディさんも美しく料理も良いと来た。ボーイさんもサービスよろしく、ムードも上々、酒もほろ酔い頃余興に入る、今年ではできるだけ並はずれたムードで楽しもうというこで、出し物はプロ級の方をステージへ送った。

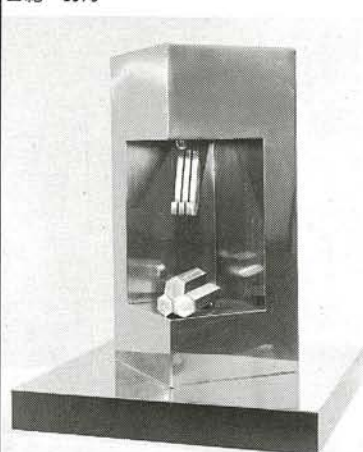
トップは全道展の淡谷のり子と佐々木悦子さんの歌に酔い、果ては愛妻家としても名の通る藤島清士さんの歌、カラオケまたよく、余興のメインイベントは矢張り国松登さんの手品に到る。もう既に画家というより「手品師のクニマツ」と言えそうである。全道展はベテランばかりがのしているのではないとばかりに、初入選の中村礼子さんが「静世さんとデュエット、若さ一杯の畠山直樹さんが「カサブランカダンディ」をのりにのって歌う。みんなうさぎさ。シルバやディスコのダンスが飛び出し、羽目はずして興じる者あり。最後は「空くじなし」のお楽しみ抽籤会で大いに湧いた。宴は終了時間過ぎて語り合いも尽きず、楽しいムードは続く――。

ラストの乾杯は、創立委員の小川原脩さん、「……キャンパスと絵具があれば、絵は描けるというものではない……、みんな頑張ろう……」と一同盃をぶつけた。今年の全道展こそ作品で勝負だとはかりに燃えた。最高のムード、万歳、一次会、三次会をもっと個性が強く、オリジナル、超巨画が続出、観衆魅了、至人曰く「こんな芸は十年に一度しか出さん」と、こんな具合で全道展の新年会は堅苦しくなく、自由でお互いの魂のぶつけ合いで「決意を新たにする」そんな中にも和気あいあい、来年は一人でも多く参加を。(文責・大地)

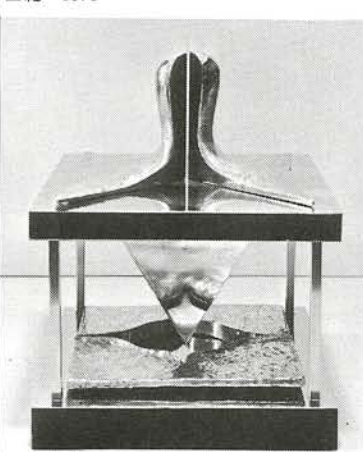
参加者 青木淳子、風玲子、浅野武彦、池田正之助、伊藤寿朗、岩山テル子、伊藤淳子、大地康雄、小関恵久子、尾崎志郎、小野寺紀子、岡本早百合、小野健美、小川原脩、川田静子、北山寛一、清田操さん、……キャンパスと絵具があれば、絵は描けるというものではない……、みんな頑張ろう……」と一同盃をぶつけた。今年の全道展こそ作品で勝負だとはかりに燃えた。最高のムード、万歳、一次会、三次会をもっと個性が強く、オリジナル、超巨画が続出、観衆魅了、至人曰く「こんな芸は十年に一度しか出さん」と、こんな具合で全道展の新年会は堅苦しくなく、自由でお互いの魂のぶつけ合いで「決意を新たにする」そんな中にも和気あいあい、来年は一人でも多く参加を。(文責・大地)



▲記 1979



▲記 1978



▲連作 接 1978

るもの」に通ずるものと思われる。こうした世界感には『結び』シリーズ作品に続く作品『記』によって一層強調されると判断します。『神へささげる』という表現から神聖なものへの畏敬の念の顕われを感じさせます。また、一連の『接』作品は、人と人との交わりに内在する虚と実の世界を一体化させた

暗示性に富んだものです。先生はユニークな発想による感覚訓練を繰り返しながら独特な感覚から生み出す発想で素材の特性を生かして現代的な処理を駆使できる人でもあります。『素材は何を選ぼうが造形美術として価値あるものならば全て包含していくべきだ』という広い見

識に立ち確固たる信念を持つて制作活動をしているようです。四年目をめどに意識的に作品のテーマを変えておられるようですが、いずれの作品にも日本人が忘れていたもの、失いつつあるものを研ぎすました感覚の中で作品に生かそうとする姿勢が感じられます。

一方、建築・都市空間等の環境を展示の場として広義の『用』としての作品の制作も継続的に続けています。工芸作品と接点を持つ造形作品としての仕事も少くありません。函館の市庁舎につながるグリンブラザの作品『飛翔』『コルテン鋼七M』があり、富良野市の冬期国体開催記念のモニュメント

の作品「北国の友がき(ヘコルテン鋼ナミM)」の作品などもあげることができそうです。

先生は全道展のほか道外では、日本現代工芸美術家協会理事・日展会員・審査員であり、日本金属造形展ドイツ共催展などに発表の場を求め、同時に道内の在住者で工芸を志向する後輩の活躍の場を作りながら、染織・陶器など材料、分野の別を問わず牽引者の役目をしておられます。

先生はますますのご活躍を祈念いたします。

詩画集『52の日曜日』
詩と木版画 玉村拓也会員
一〇〇頁・五〇〇部限定出版
定価 七、〇〇〇円

全道とわたし・全道とわたし・全道とわたし・全道とわたし・全道とわたし・全道とわたし



彫刻・札幌 竹林昌子

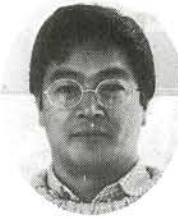
『あと一年、彫刻を続けてみようかしら』と、はなはだ頼りない発想で一年延ばしを数回繰り返して、月日が過ぎました。過ぎてしまったと言うより「造る事」の魅力的な誘惑に、ふらりゆらりついで来てしまったと言った方が正確のようです。

なにか「造る事」は解放感があると思えば、迷路のようなものにも変わつた。……摩訶不思議な魅力のあるもののように思われます。

コーヒーをバケツで飲みながら、『自分の中にあるイメージと、目の前にある作品との、微妙な不協和音に苦しみながら』雲風に不安定なイメージの行列のどこを切り棄てて生かすのか、その切り棄てのタイミングに呼吸が乱れたり……「ふー」とかはとか言いつつスローペースで制作をしています。

そんな中で、『短かい言葉』などの、端端が鋭く、静かにリソとした響きを持つていような……そんな作品をつくつてみたいものだと思います。

ホーツとしていっているうちに、全道展の時期が着々と近づいて来ています。自分の意志で造る事を規定してはいたはずなのですが、いつの間にか、造るというグルグルの渦巻きにつかまった恰好になっています。



絵画・旭川 本庄康伸

第三十八回全道展へ向けて制作中の百五十号の油絵が完成すれば、私にとって三回目の出品作になる筈だが、全道展に間に合かなければ秋の独立展に、という小さな気の緩みもあつてなかなか捗らない。

今回は身近な小物に囲まれた人物の平凡な日常の一場面で、モチーフ達は現実の空間の中に留まっていいる。変哲もない日常の風景だけれど、私にはこれだけの事でも絵にするのがとても難しい。未熟さの他に、特に意図したわけでもない幻想や思い入れといったものは、絵が額に取ると自然発生するものらしく、上手く自分を表現できないでいる。

自分自身の不消化な事柄や未分化なもの、白々しい他人行儀な表情で、画面の中から私を見返すから、これらと制作を通して付き合うのは大変だけれど、何かモヤモヤした果無い混沌を私試して、先を照してくるだろうと信じている。

友人に刺激されて出品し始めてから気付いたのだけれど、全道展にはこれといつて括れるような様式の統一はない。それだけの作家が運命によつて与えられたかのような方法で切実に、そして澄ました顔をして、てんでの方向に進んで行っている。これは北海道の広さを象徴しているように、何とも気持ち良く、その中で私も、過不足なく自分を表現できるように、まるで頑張りたいたいと思っている。



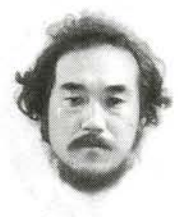
版画・札幌 菱和子

小川マリ先生がぼつりと私に語つて下さった。私は結婚してからは家の中に小さな自然を持ち込んで描いているのよ、と。マリ先生は絵のみずみずしさと女性らしい心根にすっかり魅了された。

小さなアトリエの窓は私をマツチウリの少女のように冷たいものの中に空想の展開を見せてくれる。しはれる夜の窓に自然の織りなす水紋の世界それは百合や水仙の開花、羽ばたく白鳥、羽化したばかりの蝶でも見事な星屑のグラデーション等々。やがてジョン・ブリアンの空は明るみ一大ショーはアナログチックな変化を続け幕を閉す時、体も凍てつく。

岩橋英彦氏の土という作品が好きだ。厳しい木版制作にも似た土中の胎動だ。凸版を彫るメディアを選んだ事は私にとつて必然だった。私は「水紋」に象徴される水の千変万化の音色を、手に持つ刀に共感させた。版に至るプロセスに号数が多くなると加減的に難度を増す転写がある。この作業を二年前からコピー（シャコ920）の力を得て単純化出来るよう工夫してきている。

以前、明日香氏にデッサンを学んだ時、視線の接触の五感の追求を教えられた。八木先生は陰影も重なりもはずし、すべてが空気包み込まれていくと度重ねて教えられた。大本先生はある時、詩でスケッチをし、それを絵にしなさいと言われた。人ととの出会いによつて得るもの、大きな感動する。情緒のふくらみとその表現を今年の勉強の課題として私は全道展の中で生きてゆきたい。



彫刻・小樽 二部 黎

海から吹きあがってくる風が、男を雪の一片にかえる時、雲のように空を飛ぶ自由が、男にとつて全てであった。無明の暗がりを通り、すくわれぬことを道標に雪にかすむむこうの岬から浜づたいに歩いてきた。

時と共にカラスの一羽ねむり雪のはら海と陸が互いにむきばりあい、ふみつけあうのを男は目撃してきた。時と共に歩み、追いかすことも、追いかされることもなく、時を止めたままどこまで歩いてきた。

海鳥ひとつとびして 風に 目がひかる男は仏陀の道を探っていた。吹雪に南をさらし、夕陽のような顔に染めながら、なにも選ばず、なにも選ばれず、今という時と共に尋ね歩いた。

海死際に生き阿修羅ばかりなり雪なごさこれで良い。これしかない。流れているのか流されているのか、生きていくのか生かされているのか、そのどちらでもあり、そのどちらでもなく、雪の渚を歩いている。在るがままに、全てがえらいという名の時と共に、歩いていく。しびき凍てついて 修羅の背に なみだりである。



絵画・函館 大泉康子

私がまた大学2年の頃だったろうか、函館の（伊）アパートで初めて全道展を見たのは。美術科に席を置いてはいたものの将来の希望など全く念頭になかった私にとって、このように奮然たる美術団体に巡り会えた事はやはり私を、絵によつて自己表現をする、という道に向かわせた要因の一つとなっていた。描き始めの頃はよく窓を描いた。作品のほとんどが幻想の産物で、技術の未熟さも手伝ってかいくら描いても気に入らず、何度もグチャグチャにしたらやつとどうにか完成させて出品、という具合だったのが今思えば本当に伸び伸びと描いていたようだ。

私にとつて窓というのは多分一種の境界線なのだ。向こうへ行きたいが、何か恐くて行けない、仕様がなく隙間から覗いて、といったふうな未知のものとの境界線。しかしその線は無意識な突発的な生命の欲求からくる力によつて越えられるべきものであろう。今は、きれいだ、と思うものは何でも描けるようになって、目に見えないものは勿論だが肌で感ずる風や光や空気などを描けたらもっと素適だ、とも思う。そしてその絵が確かに生命の息吹を感じさせていたなら、私はそこに安堵感を見出せるに違いない。いつもの事だが展覧会場で自分の絵を見ると、私は必ずドキドキしてしまう。……しかし生きる事への不安、表現する事への不安を抱きながらも、最後には毅然としてまっすぐに立つ事を願うばかりである。

全道展・図録・ZEN等への
意見要望・質問など

● 経費の関係もありましうから、あまり勝手なことは申せませんが、37回展の図録はちよとまずかつたと思います。あつぱつた見ばかりで(36回展の倍ぐらいの厚さ)見て、読みにく、それに写真版がぼつと白けていて、しまらない。できますなら、以前のようにしっかりした版で、紙もすく、全体としてうす手につくっていただきたいと考えます。

(答) 写真版の件は、経費、日数の関係から平版印刷にしたためと思われす。紙の件とともに改善するよう努力いたします。

(編集委)

● 図録については例年通り出品者全作品の写真は載せて欲しい。真摯な絵画論や芸術論のせるべきだが、少し肩のこらない(勿論制作と間接的に関係のあるうちとけた随筆や失敗談はいかがでしようか。

● 全道展々々会場に「言」部別別に展示してほしい。(ロ)その年の作品群の中から「全道展はこれだ」というメインコーナー(新入室下)を設けてはどうか。

● 陳列と観覧会が同日にあるか、あるいは翌日にあれば、遠くの方でも陳列の手伝いができるのですが、私の作品はいつも一番重たいので、皆さんに迷惑をかける、いつも心をいためていきます。

仲間のたより

東京 黒田栄一

● 今年は久々に一月からずと家にとじもっています。なにか面白いニュース、新しい造形物を発見したとか、銅版画への疑問、質問のある人はおペンをはかください。

● メキシコ旅行中です。 札幌 田辺謙輔
● 会務、辛労さまで。 札幌 藤島清士

● 一月十四日、時計台ギャラリー企画の北川豊道展のオープニングに出席しました。三宅通しの人物群は、さすがに巻、中でも五十六年度作品は、死を予感させるものがありました。残された美しい奥様を囲んで、集まった一人一人が、彼の絵と、人柄について、静かに燃し、熱っぽく語り合いました。冷たく凍る夜でしたが、みのある意義深いひとときでした。

● 拝啓 初めにお便りさせて頂きました。いつも楽しく読ませて頂いて居ります。私のような者にもお声をかけて頂きまして本当に有難うございます。とにかく今年も一生懸命頑張りますので、どうか宜敷くお願い致します。寒い毎日が続いて居ります。諸先生、諸先輩の皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

● 事務局を退いてマイペースの仕事をすると思いきや、何かと相談ごと、ささ絵えほんなどの仕事が舞い込み、今年のスケジュールが一杯、全道展のことと懸念り、新体制を大いに期待しています。

● 詩と木版画による詩画集「52の日曜日」、身近な暮らしの中から「人」との触れあいをテーマに作りました。一一〇ページ、五〇〇部限定出版です。定価七〇〇円。 札幌 玉村拓也

● 昨年は会員にしていた、これから全道展の皆様と同じ土壌で根がとれるとガババツておられます。又、この度、北の方イメージ、北海道の美術展覧会に於いて道立近代美術館を受賞しました。これもひとえに初出品以来皆様に戴かれた賜ものと思ひ、これから精進して心にかける作品を作りたいと思っております。よろしくお祈りします。

● 三雲祥之助のお葬式の時、折悪しく体調を悪くしていたので、失礼してつたのでその後改めてマリ夫人を訪ねました。そして全道展展成の頃の思い出話に時を忘れました。マリさんはあの吉祥寺の家にただ一人でお住まいです。在京全道展の会員の会合にも失礼つづきで、小島真在吉君には時々逢ひたい。全道展関係の方が東京で発表展をされる時には、できるだけ拝見に出ることになっています。新事務局員のご精励に感謝します。

● 日本版画協会、春陽会等、四月からの展覧会のために制作に馬力をかけています。なかなか思うように出来ません。

● 別に特記すべき事なし、ではあるが……私事、現在80Sを制作中、50%の完成度、キャンパスのせいか技術の不足か絵具の付き具合が悪く閉口の毎日で。当地は雪が多く、アトリエの二階の窓の高さまで積雪(屋根からの落雪も含む)である。お陰でスキーには好都合で何度も行っている。今日、パリ住まいの吉田康子より便りあり、どうにか順調な様子です。にぎやかな町の中心に住んでいるとのこと、よい仕事を期待しよう。

● 去年の夏以来腰痛、一月未だ癒つたこと、圧迫性椎骨骨折と診断され、二月三日から目下古小牧市立病院入院中、肝臓と一緒に治療中、牽引機で仰向けにされたままの状態毎日点滴、手鏡で窓からの雪雲を無念の気持ちで眺めておられます。もう禁酒20日間余り、バックカスの神が天空から囁きついている声が聴こえてきます。畜生々残念。

● 八月九日、十四日、札幌大丸藤井ギャラリーで、去年通つた長女のばらの遺作展、小生の個展と併せて開かせて頂きます。長女作品、まだまだ未熟ですが、親鳥鹿のせめてもの供養と思つて切ない気持ちで下し、おぼろかしい思ひですが、見てやうて下されば幸甚です。

● 厚真から鶴川へ転居しました。全くの平地で風が強く、くもりの日は太平洋の荒波の音が遠く聞これます。夏はまだ原野の音残りが、浜知子も咲きますので、皆様々来遊下さい。 札幌 福井正治

● 三月一杯で、四十年勤めた教師を退職します。いささかたびれた思ひです。退職後は時間的にはゆとりが得られると

思いますので、版画制作にも少し打ち込むことが出来るものと、自らに期待しております。

● 花川 大森亮三
● 会員福井正治氏、腰痛の為目下整形外科に入院中。おかしな話、肝臓が悪いので、内科に入院するのを待つていたのがいつの間にか整形に入院、装具をつけて牽引中、ぬけ出して飲みに行く事もかなわず、読書に専念。これがいいんですね。彼の肝臓、まだまだ回復力があると思え、禁酒だけに肝機能は快方に向つていく……。

● 苦小牧 浅野武彦
● 先日、十勝管区支部展の日程も決まり、本展、支部展に向けて制作しております。

● 豊頃 中野勝広
● 八月に札幌展第三回「トルソのある風景」シリーズで油絵展を開きます。どうぞご高覧の上、指導戴きたくご案内致します。

● 三月に入つたら出品作品にとりかかろうと思ひ、今デザインの仕事をして居ります。

● 絵画の金沢美さんが一昨年末をしましたが、殆んどもの健康を取り戻し、最近ポツポツ絵をかき始めて居るそうです。健康をお祈り致します。

● 旭川 秋田清陶
● たった一個のブラック・アフリカの飯面を描こうと振り回され、はや三年、何とか呪縛から逃れたいと考えていること、何事においても「誰かやるだろう」と思つて、丁度その年代にきていることを感ずるこの頃です。ZENの編集委員の方々のお名前を拝見してもそう思います。どうぞ大変でしょうけど頑張って下さい。

● 東京 小川洋子
● 故北川豊君の追悼展を拝見して改めて惜しい人失つたと感じたのは私ひだけではないと思う。情性を絵を描いているのが恥かしい。あといくつも毎日を描きつて生きなうと、つくづく反省しています。北川君のご冥福を祈ります。

● 札幌 池田正之助
● 二月中旬発行で、版画絵本「おぼろくちよのそら」が出ました。第一作は

きびしい批評にさらされることが世の常とかくしてあります。江別 手島圭三郎
● ZENは送られてくる分には大変嬉しい印刷物なのですが、編集をする方には大変な仕事である事を昨年は身をもつて初めて知りました。今年は高橋供人さん、他スタッフの皆さん本当に「苦勞」様です。

● 札幌 坂原チエ
● 先日北川豊さんの追悼展を見てきました。初期から現在にいたるまでの作家の足あとがうかがえ、日頃私達の迷ったる時、自分自身の制作態度に忠実であるべき、自分の感じさせられた。惜しい方が亡くなられ、非常に残念です。

● 夕張 土屋千鶴子
● 長い長い絵巻風版画を制作中ですが、公募展でこういう作風を受け入れてくれるのかと思いつつ、作りたいから作るだけ、追い込みしています。

● 札幌 宝賀寿子
● ようやく三月の声を聞くに陽差しも強くなり、冬の閑、出不精になり勝手でアトリエの中で動物園の熊よろしく往きつもとどつてしたが、春の陽ざしと共に一気にキャンパスに体当たりしたいこの頃です。

● 札幌 渡辺重夫
● ご苦勞さまで。 札幌 寺崎源治
● 九月一日頃から、ニューヨーク、ウィルデンスタイン画廊にて個展、その後ロンドン展の予定。東京 佐藤忠良
● うちのネコ(北沢 カメ)に子どもが生まれます。黒トラで美しくて。出産予定日は三月三日前後、美しくて。一報ください。名古屋西八条南三丁目、欄橋れい子(一六五四三二八九六)
● 昨年受賞の佐岡光江(工芸・染)が個展を開きます。三月、力作多数。

● 函館 折原久左門
● 八月後半にギャラリー・レティナで札幌一度目の個展を開きます。どうぞよろしく。

● 「版画館」(川倉書房刊)創刊「三春号、四月未頃発売」に作例写真と文をのせる事になりました。どうぞ一読を。

● 新事務局員の皆様、事務、辛労さまで。 水戸 水落 啓

個展グループ展案内

- 三箇三郎マラソン個展
第4回 3/24~4/5
第5回 6月
第6回 8月
五稜郭ニューギャラリー・函館
- 第2回日本、スペイン現代絵画トリエンナーレ展、木村良参加
4/6~4/25 パルセロナ市立ヴィレナ宮殿美術館・スペイン
- 田崎謙一画展
4/11~4/16 時計台ギャラリー・札幌
- 渡会純絵画展
4/11~4/24 四季画廊・太田
4/14~4/17 東京トルマン画廊
6/17~6/26 神戸ギャラリー・タビエス
- 伊藤聰一画展(スペイン・パステルデッサン)
4/14~4/19 五稜郭ニューギャラリー・函館
- 銅版画五人展 岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子、艾沢祥子
4/11~4/16 時計台ギャラリー・札幌
- 本田明二彫刻小品展
4/中旬 エルム画廊・札幌
- 大本靖木版画展
5/5~5/10 札幌(今井、大通新館) F ギャラリー
- 全道展帯広支部展
5/10~5/15 うけか和画廊・帯広(全道展本展への出品予定作や、そのエスキース的な作品を中心に)
- 棚橋永治、棚橋い子二人展
5月予定 大雪画廊・旭川
- 札幌版画会春季展(佐々木、菱、宝賀、木の瀬、瀬戸、相馬参加)
5/30~6/3 三菱ショールーム・札幌
- 中橋修画展
5/7~5/12 ブロードウェイギャラリー・東京
- 竹林昌子、彫刻個展
5/26~5/31 ギャラリーさいとう・札幌
- 星野修三画展(版画とグワッシュ)
5/30~6/4 シロタ画廊・東京
6/27~7/2 大同ギャラリー札幌
●繰(はなだ)展 染色グループ、庄司光江参加
6/14~6/19 はこだてギャラリー
●小島真佐吉近作展
6/21~6/27 パークギャラリー・札幌
7/6~7/11 国劇画廊・旭川
- 岸葉子画展
6/27~7/2 東京サエグサ画廊
- 竹岡羊子画展(リト・パステル)
7/4~7/16 ギャラリー・レティナ・2・札幌
- 小関恵久子画展
7/11~7/18 時計台ギャラリー・札幌
- 八木伸子画展
7/18~7/23 札幌大同ギャラリー
- 八木保次画展
7/18~7/23 札幌大同ギャラリー
- 福井正治画展、福井のばら遺作展
8/9~8/14 札幌大丸ギャラリー
- 彫刻家集団「北斗会」第12回展(秋山沙走武参加)
8月上旬 函館(今井)
- 水落啓画展
8/下旬 ギャラリー・レティナ
- 黒田栄一画展
8/22~8/27 札幌大同ギャラリー
- 熊谷善正画展
8/下旬~9月上旬 ギャラリー・スパックス・東京銀座
- 松岡康夫ほか 彫刻四人展
9/6~9/11 札幌大丸画廊
- 嵐玲子画展
9/19~9/24 時計台ギャラリー・札幌
- 伏木田光夫画展
9/26~10/1 時計台ギャラリー・札幌
- 藤井正画展
9/29~10/5 ギャラリー・さいとう・札幌

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 艾沢祥子

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 竹岡羊子

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●四月十二日~十六日 時計台ギャラリーC室にて銅版画五人展をやります。今年で第五回目になりますが、この一年間の作品を並べたいと思っています。メンバーは昨年同様で、岡本早百合、杉浦篤子、和田裕子、小池マリ子と私。

札幌 遠藤ミマン

●東京に帰る早々風邪にやられ臥床、メ切におくれる。仏伊国境の山中、零下二十度位の所で描いて風邪ひかず、日本に帰ってかくの如し、何々、11月1日より札幌大丸で大作を主にした近作展発表の予定、諸兄によろしく、久しぶりで全道展の審査にも出席したいと思っています。

東京 松島正幸

●彫刻家集団「北斗会」秋の国画会秋季展にむけての作品制作中

函館 秋山沙走武

●一月二十三日の全道展新年例会に旭川から私一人が出席した。始めは孤独を感じたが時の経つにつれ話に花が咲き、諸先生方のジョウクの連続に、爆笑は止まなかった。抽選会、二次会……時を忘れた。次回も参加しよう。

一月二十九日、旭川美術館に国松先生が講演に見えられたその日の夜、旭川在住全道展出品者(会員、友を含む)が二十四名、旭川エスタに集い、国松先生を囲み、工芸部門が耳を傾け、本年度の出品に意欲を燃やした。先生得意のマジシャンに燃えた二次会、三次会、三次会には「ボルス」のマスターとのマジシャンの競演に拍手の連続……時計は午前一時を過ぎていた。再度の来旭を楽しみにしているが、いつまでも元気居てほしい……。

旭川 平岡正造

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実

●春は今日くるか明日くるかと期待し

久保田 実